令和７年度　一般選抜公立大学中期日程　情報科学部 小論文
出題の意図と解答の傾向

第１問

【出題の意図】

本入試問題は、提示された資料を読み解き、それに基づいて分析し、論理的に考察する能力を評価することを目的としている。

資料として、「AI の著作権ルールを明確に」（日本経済新聞 2023 年 5 月 26 日 社説）および「生成 AI は特徴を生かし上手に使おう」（日本経済新聞 2024 年 1 月 9 日 社説）を引用し、加えて「調査レポート 生成 AI に対する消費者反応のグローバル比較 Digital Consumer Trends 2023 日本」（デロイトトーマツ）から「生成 AI ツールの認知率および利用率」と「生成 AI ツールの利用率」に関するグラフを引用した。

生成 AI の急速な発展と普及に伴い、さまざまな課題が生じている。これらの課題をどのように解決し、さらなる利活用につなげるかは、今後のイノベーションにおいて重要なテーマとなる。本入試問題では、生成 AI が直面する課題に関する資料を読み解き、その解決策を考察することを通じて、読解力、情報解釈力、分析力、および論理的思考力を評価する内容とした。

【主な採点基準】

設問 1

生成 AI を学習させる際や、生成 AI によって作品を生成する際に著作権侵害を防ぐ必要があること、また、生成 AI が生成した情報の真偽確認・検証（ファクトチェック）を行わずに利用することへの注意について論述しているかを評価した。

設問 2

資料 3 のグラフから、日本における生成 AI ツールの認知率が諸外国と同程度であるにもかかわらず、利用率が諸外国よりも低い点を読み取れているか、また、資料 4 のグラフから、日本では生成 AI ツールの利用目的が仕事や教育よりも個人的な用途に偏っている点を適切に読み取れているかを評価した。

設問 3

生成 AI のさらなる利活用に向けて、「著作権保護」と「ファクトチェック」の観点を踏まえ、これらの課題をどのように解決するか、また、資料 3 および資料 4 に示された日本の現状がどのように変化するかについて考察できているかを評価した。

【解答の傾向】

設問 1

資料１と資料２から、生成 AI を利用する際の注意点を読み取る問題であった。多くの解答が、各資料のポイントを適切に指摘できていた。主なポイントは２点あり、著作権侵害と虚偽を含む

創作であったが、無妙に論点がずれていた場合でも適切な文章で２点の両方が説明できていれば評価した。１文が長すぎる解答が散見され、減点の対象とした。

多くの答案は、著作権侵害への注意や生成文のファクトチェックの必要性に言及できていた。一方で、減点の対象となった答案の多くは、これらのポイントへの言及が不十分であったり、関連する用語が曖昧に表現されていたりした。

設問 2

資料３のグラフから、生成 AI ツールの認知率は諸外国と同程度であるものの、利用率は低いことを読み取ることが重要であるが、この点については概ね良好であった。

資料４のグラフから、日本は諸外国と比べて、生成 AI ツールを仕事や教育よりも個人的な目的で利用することが多いことが読み取れるが、教育目的での利用が少ないことのみに言及している解答が多く見られた。

諸外国と異なる日本の特徴として，資料３で示されている特徴（生成系 AI ツールの認知度はどの調査対象国も 46～63％で大差ないが，利用率は日本が最も低いこと）および，資料４で示されている特徴（日本は他国と同様に個人的な目的による利用割合が高いが，教育を目的とした利用割合が少なく，調査対象国の中で最も少ないこと）について，ほぼすべての解答で両方を言及できていた。減点の対象となったのは，指定文字数の 8 割に満たない，誤字脱字，解答用紙のマスの使い方が不適切，主述のねじれによって意味不明文となっている解答であった。

設問 3

自分なりの考えが述べられている解答は多かったが、資料に関する説明が大半であったり、問 1、2 の解答が繰り返しで書かれているものも散見された。また、文章量の少ない解答も幾つかあった。

概ね満足のいく解答が得られていたものの、資料 1 および資料 2 で提示されている「著作権保護」や「生成 AI による情報の真偽確認・検証（ファクトチェック）」の観点が、一方のみしか盛り込まれていない、あるいは両方とも欠けている解答が見受けられた。また、一部には資料の要約に終始している解答もあった。